

## ■ 当面は基本的に円キャリートレードが有効！？

年明け3日の正午過ぎ、まさに箱根駅伝でトップを行く駒澤大学が2年ぶりの総合優勝をほぼ確実にしたと誰もが感じていた頃、同日の朝方からずっと下落し続けていたドル/円が129.50円処で目先の底入れした。

そこは一目均衡表の週足「雲」上限が位置するところとほぼ同水準であり、言わばテクニカルに下げ止まって切り返す動きとなった。つまり、一時的にも垣間見られた130円処を割り込む動きに特段の意味はない。それにも拘らず「年明けから円高進行でどうなる!？」などと声高に叫ぶTVのニュースには、いつもながら笑わされる。

市場の一部からは「日銀が金融緩和の更なる修正を迫られるとの観測が強まった」という声も聞かれていたが、それも後付けのニュアンスが色濃い。そもそも、相場の方向を決定付けるような材料など、年明けからほとんど何も出てきていない。

それでも昨日(4日)のNY時間にドル円が132.72円処まで上昇したのは、一つに欧米株価の上昇に伴ってリスク選好ムードが強まったことに因るところが大きいと言える。

冷静に考えると、日銀の政策方針は依然として超緩和的である。昨年12月の政策会合で長期金利の許容変動限度幅を拡げたのは、長期金利を低位に押さえ込み続けるための指値オペなどに物理的限界が訪れたがゆえである。

なかには「黒田日銀総裁の任期満了に伴う次期総裁への交代を控えて、できる範囲内で政策に柔軟性を持たせておくという意味合いもあった」と指摘する向きもあるが、それにしても「あまりにも僅かな修正に留まった」と言わなければなるまい。

どのみち、日本と諸外国との金利差が目に見えて縮小するようになるのは、早くても年後半のこととなる。少なくとも当面は、円キャリートレードが有効となる状況が続く。とくに、市場に漂うムードがリスク選好的となった場合はなおさらである。ことしも、その点はしっかり基本に置いておきたい。

繰り返しになるが、ドル/円については一目均衡表の週足「雲」上限での下値サポートが強く意識されやすい(下図参照)。仮に、同水準を少々下抜けても、その少し下方には62週



移動平均線(62週線)が控えていて、同線も下値支持役として立派に機能すると見られる。

前回更新分でも述べたように、少し長い目で一旦は31週移動平均線(31週線)や140円処を試す展開となる可能性もあると見る。

なお、日足に目を移すとドル/円の200日移動平均線(200日線)は依然として上向きで推移しており、一段の円高方向への動きをそう易々とは容認しない。当面は、21日移動平均線(現在は133.96円)が上値の抵抗として意識されやすく、同線を明確に上抜けるかどうかが当面の焦点となる。

一方、ユーロ/ドルについては、なおも62週線をクリアに上抜けるかどうかが一つの焦点となっている。欧州における予想外の暖冬がエネルギー危機に対する懸念を和らげている点は大きく、62週線を上げてきた場合には次に再び1.10ドル処を試す動きとなる可能性もあろう。

(01月05日 10:25)